設問一　次の文章を読んで以下の各問いに答えよ。

「鹿おどし」が動いているのを見ると、その愛嬌の中に、なんとなく①人生のけだるさのようなものを感じることがある。かわいらしい竹のシーソーの一端に水受けがついていて、それに筧の水が少しずつたまる。静かに（ア）キンチョウが高まりながら、やがて水受けがいっぱいになると、シーソーはぐらりと傾いて水をこぼす。キンチョウが一気に解けて水受けが（イ）ハね上がるとき、竹が石をたたいて、こおんと、くぐもった優しい音を立てるのである。

見ていると、単純な、（ウ）ユルやかなリズムが無限にいつまでも繰り返される。キンチョウが高まり、それが一気にほどけ、＜ A ＞何事も起こらない②徒労がまた一から始められる。＜ B ＞、くぐもった音響が時を刻んで、庭の静寂と時間の長さをいやがうえにも引き立てるだけである。水の流れなのか、時の流れなのか、「鹿おどし」は我々に流れるものを感じさせる。それをせき止め、刻むことによって、この仕掛けはかえって③流れてやまないものの存在を強調しているといえる。

私はこの「鹿おどし」を、ニューヨークの大きな銀行の待合室で見たことがある。日本の古い文化がいろいろと紹介される中で、あの（エ）ソボクな竹の響きが西洋人の心を引きつけたのかもしれない。だが、ニューヨークの銀行では人々はあまりに忙しすぎて、一つの音と次の音との長い（オ）カンカクを聞くゆとりはなさそうであった。それよりも、窓の外に吹き上げる華やかな噴水のほうが、ここでは水の芸術として明らかに人々の気持ちをくつろがせていた。

【 X 】水と、噴き上げる水。

そういえばヨーロッパでもアメリカでも、町の広場には至る所に見事な噴水があった。ちょっと④名のある庭園に行けば、噴水はさまざまな趣向を凝らして風景の中心になっている。有名なローマ郊外のエステ家の別荘など、何百という噴水の群れが庭をぎっしりと埋め尽くしていた。樹木の草木もここでは⑤添えものにすぎず、壮大な水の造型がとどろきながら林立しているのに私は息をのんだ。それは揺れ動くバロック彫刻さながらであり、ほとばしるというよりは、音を立てて空間に静止しているように見えた。

時間的な水と【 Y 】的な水。

そういうことをふと考えさせるほど、日本の伝統の中に噴水というものは少ない。せせらぎを作り、滝をかけ、池を掘って水を見ることはあれだけ好んだ日本人が、噴水の美だけは近代に至るまで忘れていた。伝統は恐ろしいもので現代の都会でも、日本の噴水はやはり西洋のものほど美しくない。そのせいか東京でも大阪でも、町の広場はどことなく間が抜けて、表情に（カ）トボしいのである。

西洋の空気は乾いていて、人々が吹き上げる水を求めたということもあるだろう。ローマ以来の水道の技術が、噴水を発達させるのに有利であったとも考えられる。だが、人工的な滝を作った日本人が、噴水を作らなかった理由は、⑥そういう外面的な事情ばかりではなかったように思われる。日本人にとって水は自然に流れる姿が美しいのであり、圧縮したりねじ曲げたり、粘土のように造型する対象ではなかったのであろう。

＜ C ＞、水にはそれ自体として定まった形はない。そうして、形がないということについて、おそらく⑦日本人は西洋人と違った独特の好みを持っていたのである。「⑧行雲流水」という仏教的な言葉があるが、そういう思想は＜ D ＞思想以前の感性によって裏づけられていた。それは⑨外界に対する受動的な態度というよりは、積極的に、形なきものを恐れない心の現れではなかっただろうか。

見えない水と、目に見える水。

もし、流れを感じることだけが大切なのだとしたら、我々は水を実感するのに、もはや水を見る必要さえないと言える。ただ断続する音の響きを聞いて、その間隙に流れるものを間接に心で味わえばよい。そう考えればあの⑩「鹿おどし」は、日本人が水を鑑賞する行為の極致を表す仕掛けだと言えるかもしれない。

問一　傍線部①とあるが、「鹿おどし」のどのようなところにそれを感じるというのか。

問二　二重傍線部（ア）～（カ）のカタカナを漢字に直せ。

問三　＜ A ＞～＜ D ＞に入るべき語として適当なものを次の中からそれぞれ選び記号で答えよ。

ア…言うまでもなく　イ…しかし　ウ…ただ　エ…むしろ

問四　傍線部②④⑤の語句の意味を答えよ。

No1（表）

問五　空欄【X】（三文字）【Y】（漢字二字）に入るべき語を考えて記せ。
問六　傍線部③「流れてやまないもの」の指す内容を記せ。
問七　傍線部⑦とあるが、日本人が持っていた西洋人と違った独特の好みとは何か。十五字以上二十字以内で抜き出せ。
問八　傍線部⑧「行雲流水」の語句の読みを記せ。
問九　傍線部⑨とあるが、そのようにも受け取ることが出来るのはなぜか。
問十　傍線部⑩とあるが、それはなぜか。
問十一　この文章の著者の姓名を漢字で記せ。

設問二　次の文章を読んで以下の各問いに答えよ。

作者はさっき、「下人が雨やみを待っていた」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようという当てはない。ふだんなら、もちろん、主人の家へ帰るべきはずである。ところがその主人からは、四、五日前に暇を出された。前にも書いたように、当時京都の町はひととおりならず（ア）スイビしていた。今この下人が、永年、使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこのスイビの小さな余波にほかならない。だから「下人が雨やみを待っていた」というよりも、「雨に降りこめられた下人が、行き所がなくて、途方に暮れていた」と言う方が、適当である。そのうえ、①今日の空模様も少なからず、この平安朝の下人の、Sentimentalisme（サンチマンタリスム）に影響した。②申の刻下がりから降り出した雨は、いまだに上がる気色がない。そこで、下人は、何をおいても差し当たり明日の暮らしをどうにかしようとしてーいわばどうにもならないことを、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さっきから朱雀大路に降る雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。

雨は、羅生門を包んで、遠くから、③ざあっという音を集めてくる。（イ）ユウヤミはしだいに空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜めに突き出した（ウ）甍の先に、重たく薄暗い雲を支えている。

どうにもならないことを、どうにかするためには、手段を選んでいるいとまはない。選んでいれば、築土の下か、道端の土の上で、飢え死にをするばかりである。そうして、この門の上へ持ってきて、犬のように捨てられてしまうばかりである。選ばないとすればー下人の考えは、何度も同じ道を④低回したあげくに、やっとこの局所へ逢着した。しかしこの「すれば」は、いつまでたっても、結局「すれば」であった。下人は、手段を選ばないということを肯定しながら、この「すれば」のかたをつけるために、当然そのあとに来るべき「盗人になるよりほかにしかたがない」ということを、積極的に肯定するだけの勇気が出ずにいたのである。（中略）

それから、何分かののちである。羅生門の楼の上へ出る、幅の広いはしごの中段に、一人の男が、猫のように身を縮めて、息を殺しながら、上の様子をうかがっていた。楼の上から差す火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしている。短いひげの中に、赤くうみをもったにきびのある頬である。下人は、初めから、この上にいる者は、死人ばかりだと⑤たかをくくっていた。それが、はしごを二、三段上ってみると、上では誰か火をとぼして、しかもその火をそこここと、動かしているらしい。これは、その（エ）ニゴった、黄色い光が、隅々にくもの巣をかけた天井裏に、揺れながら映ったので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしているからには、どうせただの者ではない。

下人は、やもりのように足音を盗んで、やっと急なはしごを、いちばん上の段まで這うようにして上りつめた。そうして体をできるだけ、平らにしながら、首をできるだけ、前へ出して、恐る恐る、楼の内をのぞいてみた。

見ると、楼の内には、うわさに聞いたとおり、いくつかの死骸が、（オ）無造作に捨ててあるが、火の光の及ぶ範囲が、思ったより狭いので、数はいくつともわからない。ただ、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあるということである。もちろん、中には女も男もまじっているらしい。そうして、その死骸はみな、それが、かつて生きていた人間だという事実さえ疑われるほど、土をこねて造った人形のように、口を開いたり手を伸ばしたりして、ごろごろ床の上に転がっていた。しかも、肩とか胸とかの高くなっている部分には、ぼんやりした火の光を受けて、低くなっている部分の影をいっそう暗くしながら、永久におしのごとく黙っていた。

下人は、それらの死骸の腐乱した臭気に思わず、鼻を覆った。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を覆うことを忘れていた。⑥ある強い感情が、ほとんどことごとくこの男の（カ）嗅覚を奪ってしまったからである。

下人の目は、そのとき、初めて、その死骸の中にうずくまっている人間を見た。檜皮色の着物を着た、背の低い、痩

せた、白髪頭の、⑦猿のような老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松の木切れを持って、その死骸の一つの顔をのぞき込むように眺めていた。髪の毛の長いところを見ると、たぶん女の死骸であろう。

下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、(キ)暫時は息をするのさえ忘れていた。旧記の記者の語を借りれば、「頭身の毛も太る」ように感じたのである。すると、老婆は、松の木切れを、床板の間に挿して、それから今まで眺めていた死骸の首に両手をかけると、ちょうど、猿の親が猿の子のしらみを取るように、その長い髪の毛を一本ずつ抜き始めた。髪は手に従って抜けるらしい。

その髪の毛が、一本ずつ抜けるのに従って、下人の心からは、恐怖が少しずつ消えていった。そうして、それと同時に、この老婆に対する激しい(ク)憎悪が、少しずつ動いてきた。―いや、この老婆に対すると言っては、⑧語弊があるかもしれない。むしろ、あらゆる悪に対する反感が、一分ごとに強さを増してきたのである。このとき、誰かがさっき門の下でこの男が考えていた、飢え死にをするか盗人になるかという問題を、改めて持ち出したら、おそらく下人は、なんの未練もなく、【　⑨　】を選んだことであろう。それほど、この男の悪を憎む心は、老婆の床に挿した松の木切れのように、勢いよく燃え上がり出していたのである。(中略)

「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、かつらにしょうと思うたのじゃ」

下人は、老婆の答えが存外、平凡なのに失望した。そうして失望すると同時に、また前の憎悪が、冷ややかな侮蔑といっしょに、心の中へ入ってきた。すると、その気色が、先方へも通じたのであろう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭から奪った長い抜け毛を持ったなり、蟇のつぶやくような声で、口ごもりながら、こんなことを言った。

「なるほどな、死人の髪の毛を抜くということは、なんぼう悪いことかもしれぬ。＜ア＞、ここにいる死人どもは、みな、そのくらいなことを、されてもいい人間ばかりだぞよ。＜イ＞、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりずつに切って干したのを、干し魚だと言うて、太刀帯の陣へ売りに往んだわ。疫病にかかって死ななんだら、今でも売りに往んでいたことであろ。＜ウ＞、この女の売る干し魚は、味がよいと言うて、太刀帯どもが、欠かさず菜料に買っていったそうな。わしは、この女のしたことが悪いとは思うていぬ。せねば、飢え死にをするのじゃて、しかたがなくしたことであろ。されば、今また、わしのしていたことも悪いこととは思わぬぞよ。これとてもやはりせねば、飢え死にをするのじゃて、しかたがなくすることじゃわいの。＜エ＞、そのしかたがないことを、よく知っていたこの女は、おおかたわしのすることも大目に見てくれるであろ」

老婆は、だいたいこんな意味のことを言った。

下人は、太刀を鞘に収めて、その太刀の柄を左の手で押さえながら、冷然として、この話を聞いていた。もちろん、右の手では、赤く頬にうみを持った大きなにきびを気にしながら、聞いているのである。しかし、これを聞いているうちに、下人の心には、⑩ある勇気が生まれてきた。それは、さっき門の下で、この男には欠けていた勇気である。そうして、またさっきこの門の上へ上がって、この⑪老婆を捕らえたときの勇気とは、全然、反対な方向に動こうとする勇気である。下人は、飢え死にをするか盗人になるかに、迷わなかったばかりではない。そのときの、この男の心持ちから言えば、飢え死になどということは、ほとんど考えることさえできないほど、意識の外に追い出されていた。

「きっと、そうか」

老婆の話が終わると、下人は、⑫嘲るような声で念を押した。そうして、一足前へ出ると、不意に右の手をにきびから離して、老婆の襟髪をつかみながら、かみつくようにこう言った。

「では、俺が引剥ぎをしようと恨むまいな。俺もそうしなければ、飢え死にをする体なのだ」

下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎ取った。それから、足にしがみつこうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。はしごの口までは、わずかに五歩を数えるばかりである。下人は、剥ぎ取った檜皮色の着物を脇に抱えて、またたく間に急なはしごを夜の底へ駆け下りた。

しばらく、死んだように倒れていた老婆が、死骸の中から、その裸の体を起こしたのは、それから間もなくのことである。老婆は、つぶやくような、うめくような声をたてながら、まだ燃えている火の光を頼りに、はしごの口まで、這っていった。そうして、そこから、短い白髪を逆さまにして、門の下をのぞき込んだ。外には、ただ、⑬黒洞々たる夜があるばかりである。

下人の行方は、誰も知らない。

問一　傍線部①とはどういうことを述べたものか。

問二　傍線部②「申の刻」は現在の何時ごろのことか。

問三　傍線部③のような語を何と言うか。(漢字三字)

No2(表)

問四　二重傍線部（ア）～（ク）のカタカナは漢字に直し、漢字にはその読みを記せ。

問五　傍線部④⑤⑧の語句の意味を説明せよ。

問六　傍線部⑥「ある強い感情」とは具体的にはどのようなものか。本文中から十五字以内で抜き出せ。

問七　傍線部⑦の比喩の種類は何か。

問八　空欄【⑨】に入るべき語を記せ。

問九　傍線部⑩とは、どのような勇気か。本文中の語句を用いて九字以内で答えよ。

問十　傍線部⑪とは、どのような心情か。本文中から十字以上、十五字以内で抜き出して記せ。

問十一　傍線部⑫とあるが、どうしてこのような行動をしたのか。その理由を記せ。

問十二　＜ア＞～＜エ＞に入るべき語として適当なものを次の中からそれぞれ選び記号で答えよ。

①…現に　②…じゃが　③…じゃて　④…それもよ

問十三　傍線部⑬「黒洞々たる夜」の象徴しているものは何か。

問十四　羅生門の作者、芥川龍之介の作品についての次の各問いの答えとして適当なものを選択肢から選び答えよ。

1　芥川が漱石から激賞された作品は何か？

2　芥川が芸術に打ち込む自らの姿を託した作品は？

3　芥川晩年の作品で架空の社会を描きつつ現代社会を寓意的に書いた作品は？

4　芥川死後に遺稿として見つかった作品は？

【選択肢】

芋粥　手巾　鼻　蜘蛛の糸　枯野抄　戯作三昧　地獄変

歯車　杜子春　あばばばば　河童　蜜柑　奉教人の死

設問三　次の一～五の（　　）の部分を漢字で書きなさい。

一　前近代的なあり方がいまだに（トウシュウ）されている。

二　（ヘイオン）な生活の重要性に初めて気づく。

三　（カジョウ）防衛的に自己の立場を守る。

四　人間関係が（エンカツ）に運ぶことを望む。

五　日本の近代化は（キョウイ）的な速度で進んだ。

No2（うら）

1×8=8
2×21=42 / 50

問十二、十四 1点
他 2点

2点

(10)

(50)

1×4=4
2×18=36 / 40

問三のみ 1点
他 2点

(40)

設問一

問一 緊張が高まり、それが一気にほどけ、何事もおこらないということがえんえんと繰り返される、ところ。

問二
ア 緊張
イ 跳
ウ 緩
エ 素朴
オ 間隔
カ 乏

問三
A イ
B ウ
C ア
D エ

問四
② むだな苦労
④ 有名な

問五
⑤ つけたし、おまけ
X 流れる
Y 空間

問六 水の流れと時間の流れ

問七 積極的に形なきものを恐れない心。

問八 こううんりゅうすい

問九 行雲流水は、自然のなりゆきに身をまかせるという意味なので受け身な態度だとも考えられるから。

問十 水を見ることなく、水を実感することができるから。

十一 山崎正和

設問二

問一 下人は主人に暇をだされて途方にくれていたが、今日の雨という天気が下人の気持ちをいっそう感傷的にかなしい方向にあおりたてたということ。

問二 午後四時ごろ

問三 擬音語

問四
ア 衰微
イ 夕闇
ウ いらか
エ 濁
オ むぞうさ
カ きゅうかく
キ [illegible]
ク ぞうお

問五
④ 行ったりきたりすること
⑤ 大したことはないとまくみること
⑧ 言葉の使い方が適切でないことからおこる弊害。

問六 六合の恐怖と四合の好奇心

問七 直喩

問八 飢え死に

問九 盗人になる勇気

問十 あらゆる悪に対する反感

十一 生きるためにする悪は許されるという自己弁護のための老婆の論理が下人の盗人になる勇気を生み、結果的に老婆はその被害者となってしまうから。

十二
ア ②
イ ①
ウ ④
エ ③

十三 下人の暗い未来。

十四
1 鼻
2 戯作三昧
3 河童
4 歯車

設問三

一 踏襲
二 平穏
三 過剰
四 円滑
五 敬慕